土台を据える

「神の力を伝える」

Ⅰ歴代誌 28：20 を宣言しましょう。ダビデがソロモンに宮を完成させるために与えた指示です。「あなた」となっている箇所を、「私たち」に言い換えて宣言し、それを自分自身のものとしましょう。それが宣言の機能の一つであり、みことばを個人的なものとさせることができます。

> *「強く、雄々しく、事を成し遂げなさい。恐れてはならない。おののいてはならない。神である主、私たちの神が、私たちとともにおられるのだから――。主は、私たちを見放さず、私たちを見捨てず、主の宮の奉仕のすべての仕事を完成させてくださる。」*
> アーメン！

では、ヘブル 6：1-2 にある 6 つの基礎の教理を続けて学びましょう。最初の 3 つの教理を学んできました。死んだ行いからの回心、神への信仰、きよめの洗い（バプテスマの教理）です。きよめの洗いの教えに関連して、新約聖書には 3 つのバプテスマが記されていることを知りました。バプテスマのヨハネのバプテスマ、キリスト教のバプテスマ、聖霊のバプテスマです。

では、6 つの基礎の教理の 4 つ目、手を置くこと（按手）について学んでいきます。このメッセージのタイトルを、「神の力を伝える」と表現しました。

手を置くことが基礎の教理に含まれていることに少し驚く人もいるかもしれません。なぜなら、最近の多くの教会では語られることが少ないからです。しかし、考えてみると、それはとても論理的で、存在しなければならないものです。なぜなら、手を置くこと、あるいは神の力と権威を伝え移すことは、キリストのからだへの継続性をもたらすものだからです。それは、主任牧師とユースパスターをつなぎ、一つの世代から次の世代へとつないでいくものです。ですから、この「手を置く」という働きの機能は、キリストのからだに連続性を生み出すことです。それは、使徒ペテロの日から現在まで守られてきたと主張する教会もあります。私はその主張についてではなく、「手を置く」ことの背後にある理由が論理的であると言いたいのです。私たちは世代から世代へ、またミニストリーからミニストリーへと引き継がれる方法が必要であり、その方法がこの手を置く、按手という儀式として聖書に提供されているのです。

興味深いことに、それは聖書の最初の書から見られ、神の民の歴史全体にわたって行われています。神の民の歴史には不可欠な要素なのです。

それには、霊的な目的が含まれていると言えるでしょう。第一に、誰かに手を置くことは、自然な人間の反応です。母親は、熱を出した赤ちゃんの額に自然に手を当てるでしょう。また、長い間会っていなかった友人同士が出会うとき、互いの肩に手を置いたり、握手をしたりします。手は人が互いにつながりを作る主な方法の一つです。

霊的な面では、完成されるべき特定の目的があります。第一に、伝達です。聖書には、祝福、権威、知恵、聖霊、霊的賜物、奉仕を伝達するために按手の儀式が用いられています。

第二に、委任です。キリストのからだなる教会の奉仕の場所をある人に委任する聖書的な方法で、それ自体、神の任命を承認するものです。教会の物事は投票で決めるものではないことを理解しなければなりません。神は投票を必要とされません。多くの教会では、役員や牧師、その他の役割のための投票をしますが、実はそれは聖書的ではありません。任命をする方は神です。イエスは弟子たちに「あなたがたが私を選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び…」と言いました。そのことは、教会内のすべての役割やミニストリー、そして任命において当てはまると信じます。その選択をしたのは人間ではなく神です。なぜなら、イエス・キリストがご自身のからだである教会のすべてのかしらだからです。私は、イエスの権威によらない任命は有効であると思いません。任命とは、人を特定のものにするものではなく、その人がどうあるべきか、神が決めたことを認めるものだと信じます。役員について話し合う教会のミーティングの中にあなたが出席しているなら、あなたの目的は、あなたが誰に役員になってもらいたいかを決めるのではなく、神が役員として選んだ人を決定するためであると思います。そこが完全に異なります。私たちは、聖書や教会の中にあるべきではない民主主義によって堕落している面があります。

第三に、按手は、支持したり、権威を与えたりするために用いられます。

第四に、整えるために用いられます。霊的賜物や霊的権威、そのほか、神が任命した働きを行うためにその人に必要なものを与えるためです。

重要なことですので、復習しましょう。人々を任命するときに「手を置く」ことは、承認するために用いられますが、神の選びの人を指名するのではありません。特定の働きのために人を任命するためです。権威をもってその働きをする人を承認することです。その人に必要なすべての霊的権威や霊的賜物が備わるようにと用いられるものです。

いくつかの例を見てみましょう。一つ目は、旧約聖書からです。創世記 48：8-20 節までのとても興味深い箇所を読みましょう。ヨセフは父ヤコブに祝福してもらうために、二人の息子をヤコブのところに連れてきました。神ご自身の祝福に次いで最も望ましい祝福は、父あるいは祖父からの祝福ではないかと思います。聖書を読むと、父の祝福を受けることが非常に重要であることがわかります。
まず 8-11 節を読みます。

> *「イスラエルはヨセフの子らに気づいて言った。『これはだれか。』ヨセフは父に答えた。『神がここで私に授けてくださった子どもです。』すると父は、『彼らを私のところに連れて来なさい。私は彼らを祝福しよう』と言った。イスラエルの目は老齢のためにかすんでいて、見ることができなかった。それでヨセフが彼らを父のところに近寄らせると、父は彼らに口づけし、彼らを抱いた。イスラエルはヨセフに言った。『私はあなたの顔が見られようとは思わなかったのに、今こうして、神はあなたの子どもをも私に見させてくださった。』」*

私は、神の忠実さにとても感動を覚えます。悲しみの涙ではなく、神の忠実さに感動して涙があふれてくるのです。12 節です。

「ヨセフはヤコブのひざから彼らを引き寄せて、顔を地につけて、伏し拝んだ。」

聖書の中の人物が両親や長老を尊敬していることに注目してください。13-14 節。

「それからヨセフはふたりを、エフライムは自分の右手に取ってイスラエルの左手に向かわせ、マナセは自分の左手に取ってイスラエルの右手に向かわせて、彼に近寄らせた。すると、イスラエルは、右手を伸ばして、弟であるエフライムの頭の上に置き、左手をマナセの頭の上に置いた。マナセが長子であるのに、彼は手を交差して置いたのである。」

通常、より大いなる祝福を受けるために長子に右手を置きます。ですから、ヨセフは長男であるマナセをヤコブの右側に近寄らせました。しかし、聖霊の促しにより、ヤコブは自分の手を交差して右手をエフライムに、左手をマナセに置いたのです。15-16 節。

「それから、ヨセフを祝福して言った。『私の先祖アブラハムとイサクが、その御前に歩んだ神。きょうのこの日まで、ずっと私の羊飼いであられた神。すべてのわざわいから私を贖われた御使い・・・』」

ヤコブがわざわいから贖われたのは、どこでしたか。ヤコブはペヌエルで御使いに会った時のことを言っているのです。続けて読みます。

「この子どもたちを祝福してください。私の名が先祖アブラハムとイサクの名とともに、彼らのうちにとなえ続けられますように。また彼らが地のまなかで、豊かにふえますように。」

名前を伝えることが、どれほど重要かお分かりになるでしょう。今日、多くのものが時代遅れになりますが、神のものは時代遅れになることはありません。17 節-20 節。

「ヨセフは父が右手をエフライムの頭の上に置いたのを見て、それはまちがっていると思い、父の手をつかんで、それをエフライムの頭からマナセの頭へ移そうとした。ヨセフは父に言った。『父上。そうではありません。こちらが長子なのですから、あなたの右の手を、こちらの頭に置いてください。』しかし、父は拒んで言った。『わかっている。わが子よ。私にはわかっている。彼もまた一つの民となり、また大いなる者となるであろう。しかし弟は彼よりも大きくなり、その子孫は国々を満たすほど多くなるであろう。』そして彼はその日、彼らを祝福して言った。『あなたがたによって、イスラエルは祝福のことばを述べる。“神があなたをエフライムやマナセのようになさるように。”』こうして、彼はエフライムをマナセの先にした。」

それはとても鮮明な場面です。非常に明確です。より大きな祝福は、父の右手から来ることがわかります。しかし、何かを伝え与えることは形式的なことではなく、非常に現実的なことです。単なる儀式ではなく、エフライムとマナセという 2 人の若者の人生への重要な作用で、それ以降の彼らの人生をまさに決定づけるものでした。

ですから、聖霊によって行われる「手を置く」ことの意義と重要性を決して軽視しないでください。

次に、民数記 27 章を見てみましょう。モーセが自分に従う指導者を任命する時が来たことを主に申し出ている場面です。モーセは自分が約束の地に入らないことを知っていましたが、神の民イスラエルのことを非常に心配していました。ですから、民数記 27：15 で主にこのように言っています。

「それでモーセは主に申し上げた。『すべての肉なるもののいのちの神、主よ。ひとりの人を会衆の上に定め…』」

これは重要なことです。主は、すべての肉なるもののいのちの神です。すべての人の霊を知っておられ、人の人格の最も奥深くを見抜いておられる神です。

「すべての肉なるもののいのちの神、主よ。ひとりの人を会衆の上に定め、彼が、彼らに先立って出て行き、彼らに先立って入り、また彼らを連れ出し、彼らを入らせるようにしてください。主の会衆を、飼う者のいない羊のようにしないでください。」

羊飼いのいない羊は散らされ、えじきとなることは、聖書の始めから終わりまで書かれています。聖書全体が一貫してそのメッセージを語っています。特別な状況でない限り、私たちはたましいを見守り、世話をしてくれる人間の羊飼いを持つべきです。これは非常に重要なことです。
さて、主はどのようにモーセに応答していますか。

「主はモーセに仰せられた。『あなたは神の霊の宿っている人、ヌンの子ヨシュアを取り、あなたの手を彼の上に置け。彼を祭司エルアザルと全会衆の前に立たせ、彼らの見ているところで彼を任命せよ。あなたは、自分の権威を彼に分け与え…』」

私はこの部分が好きです。モーセは特別な権威を持っていたので、すべてを与えるのではありません。しかし、「モーセよ、あなたの権威の相当な権限をヨシュアに分け与えなさい。彼はそれを必要とするからだ」ということです。続けて読みます。

「あなたは、自分の権威を彼に分け与え、イスラエル人の全会衆を彼に聞き従わせよ。彼は祭司エルアザルの前に立ち、エルアザルは彼のために主の前でウリムによるさばきを求めなければならない。ヨシュアと彼とともにいるイスラエルのすべての者、すなわち全会衆は、エルアザルの命令によって出、また、彼の命令によって、入らなければならない。モーセは主が命じられたとおりに行った。ヨシュアを取って、彼を祭司エルアザルと全会衆の前に立たせ、自分の手を彼の上に置いて、主がモーセを通して告げられたとおりに彼を任命した。」

自分たちが 40 年間従ってきたモーセから後継者へと権威が分け与えられるのを、全会衆が見なければなりませんでした。それは、すべての神の民の幸福のために不可欠な引き継ぎでした。

さらに、それは単なる儀式ではなく、あることがヨシュアに実際に起こりました。申命記 34：9 に興味深い記事があります。

「ヌンの子ヨシュアは、知恵の霊に満たされていた。モーセが彼の上に、かつて、その手を置いたからである。」

手を置くことによってヨシュアが受けたものは、知恵の霊でした。単なる形式や儀式ではなく、現実的な分与です。

旧約聖書のもう一つの例を見てみましょう。II 列王記 13 章です。これは、エリシャの奉仕の終わりの場面です。エリシャは死んで葬られましたが、ある人たちが別の人を埋葬しようとしていたときに、イスラエルに侵入してきた略奪隊を見て驚き、その人たちはその別人の遺体をエリシャの墓に投げ入れて去って行きました。そしてその遺体がエリシャの骨に触れたとき、その人は生き返りました。神の力は実に多くの不思議な方法で分け与えられるのです。II 列王 13：14 を読みましょう。

「エリシャが死の病をわずらっていたときのことである…」

今からお話しすることを、あなたは想像できないかもしれません。エリシャは病気で死にましたが、彼の骨は神の力で満たされていたので、死人がエリシャの骨に触れたとき、その死人は生き返ったのです。あなたはそれを説明することができません。私たちには説明できないことがあるのです。

神がなさることすべてに説明を求めようとする人がいますので、このことを簡単に分かち合わせてください。何年か前、妻と私が南アフリカのある教会で奉仕をしていたとき、知り合いの若い牧師がスポーツ中に転んで、腕を 4 か所骨折しました。彼が祈ってほしいと私のところに来たので、私はこう言いました。「変だと思うかもしれませんが、神が示されたことなので、あなたの脚を見せてくれませんか。もし、あなたの足の長さが違っているなら、短い方の足は伸びます。あなたは神が触れてくださったことを知るでしょう。」そしてさらにこう言いました。「そのことを神に大いに感謝してください。」人は本当の必要がある時、他の時には決してしないような不思議なことをします。彼はこの「手を置く」、すなわち私が彼の短い方の脚を持つと、その足が伸びたのです。神が彼に触れてくださったのです。彼は病院に行ってレントゲンを撮りました。これは私には説明できませんが、腕が 4 か所折れていましたが、そのうちの 3 か所は完全に治っており、4 本目はなお骨折したままでした。主任牧師は私に、「どういうことか説明してください」と聞きましたが、私には説明できません。彼は 75％つまり、四分の三の信仰があったとも言えるでしょうが、納得できる説明ではありません。私は神がなさることの一つ一つに説明する人々にうんざりしています。神がなさることで私が説明できないことはたくさんあります。それが神の領域であることを私は喜んでいます。
では、先ほどの話に戻りましょう。

「イスラエルの王ヨアシュは、彼のところに下って行き、彼の上に泣き伏して、『わが父。わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち』と叫んだ。」

これは、エリヤが馬車によって引き上げられる時（II 列王記 2：12）に、エリシャが言ったことと同じことばです。それには、実に私たち全員のためのメッセージが含まれています。神を本当に知っている人は国を守ることができ、その人は軍よりも強いのです。そして、ヨアシュは神のような王ではあり

ませんでしたが、彼はエリシャがイスラエルにとって重要であったことを認識していました。

「エリシャが王に、『弓と矢を取りなさい』と言ったので、彼は弓と矢をエリシャのところに持って行った。彼はイスラエルの王に、『弓に手をかけなさい』と言ったので、彼は手をかけた。すると、エリシャは自分の手を王の手の上にのせて、『東側の窓をあけなさい』と言ったので、彼がそれをあけると、エリシャはさらに言った。『矢を射なさい。』彼が矢を射ると、エリシャは言った。『主の勝利の矢。アラムに対する勝利の矢。あなたはアフェクでアラムを打ち、これを絶ち滅ぼす。』」

そして、王は矢で 3 回打って、3 度アラムを打ち負かしたと書いています。エリシャは、もっと打つべきだったと、彼に怒っています。しかし、私が言いたいことは、エリシャは王が弓を手にしたとき、自分の手を王の手にのせて、弓に力を与えたことです。それは霊の領域ですが、一人の人がもう一人の人に手を置くときに、何か実際的なことが起こるということを示しています。

では、新約聖書が示している「手を置く」ことの目的について考えてみましょう。まず、病人を癒やすためです。イエスはマルコ 16：17-18 で弟子たちに命令を与えたとき、こう言っています。

「信じる人々には次のようなしるしが伴います…」

それらの 5 つ目のしるしは、

「…病人に手を置けば病人はいやされます。」

つまり、病人に手を置くことは、神の癒やしの働きの方法です。ヤコブ 5：14 にもう一つの儀式が書かれています。

「あなたがたのうちに病気の人がいますか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。」

病人のために祈ることと、病人に手を置いて祈ることは似ていますが、さらに油を塗って祈るのです。みなさんもご存知だと思いますが、油は、常に聖霊を表します。油が癒やしをもたらすのではなく、「手を置く」ことを通して病人のからだの中に聖霊を解き放つ象徴です。

では、単に手を置くことと、油を塗って手を置くことの違いは何でしょうか。これはとてもよく似ていますが、油を塗らずに手を置くことは、教会員ではない人のためであると言えます。しかし、教会員のためには、油を塗ることを含んでいます。新約聖書は通常、すべての信者が教会につながるべきであると示しているので、「あなたがたクリスチャンの中に病気の人がいますか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい」となっているのです。あなたが日曜日の朝、教会へ行って、夕方別の教会に行くなら、あなたはどちらの教会の長老を呼びますか。また、もしあなたに招くべき長老がいないなら、病気の時はどうしますか。新約聖書は例外を除き、信者は教会の一員となり、リーダーシップに知ってもらい、その人もリーダーシップを承認し、リーダーシップがその人の奉仕の対象となるようにすべきであることを想定しています。

その他のことについて少し説明しましょう。今日のテーマではありませんが、黙示録 2-3 章で 7 つのメッセージが 7 つの教会に送られています。教会にだけ送られているのです。教会にいない人はそのメッセージを受け取ることができません。神はそのことを強調したいのだと私は感じます。みなさんの中には、山のやぎのように群れから離れ、羊飼いのいない人もいるのではないでしょうか。それは危険なことです。人間の権威にあなた自身を従わせることは、謙遜になることです。神はその謙遜さを祝福し、高慢を退けられます。あなたはどちらかを選ばなければなりません。

それを適用できない例外の状況があります。しかし、そのような状況でない限り、あなたは例外とはならないでください。

手を置く儀式の次の目的は、御霊の賜物を分け与えることです。まず、使徒の働き 8 章の、ピリポがサマリヤに行ってキリストを宣べ伝え、しるしと奇跡を行い、信じたその町の人がみなバプテスマを受けたという箇所です。彼らは救われました。なぜならイエスは、「信じてバプテスマを受ける者は救われる」と言われたからです。しかし、使徒たちは何か欠けているものがあるとわかっていたので、満足していませんでした。使徒の働き 8：14-16 です。

> *「さて、エルサレムにいる使徒たちは、サマリヤの人々が神のことばを受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネを彼らのところへ遣わした。ふたりは下って行って、人々が聖霊を受けるように祈った。彼らは主イエスの御名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊がまだだれにも下っておられなかったからである。」*

これは、聖霊を受けていなくても救われる可能性があることを明確に示しています。聖霊はナイアガラの滝のように上からあふれるように下ってきます。17 節です。

> *「ふたりが彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。使徒たちが手を置くと御霊が与えられるのを見たシモンは、使徒たちのところに金を持って来て、『私が手を置いた者がだれでも聖霊を受けられるように、この権威を私にも下さい』と言った。」*

このように、使徒たちの手が置かれることによって、聖霊が与えられました。

そして次の章では、サウロがダマスコへの途上でイエスに出会った後、目が見えなくなり、3 日間断食し、使徒でも預言者でもない、単に弟子であったアナニヤが、主からの導きによってサウロのいた家に行き、彼のために手を置いて祈りました。すると、サウロは目が見えるようになり、聖霊を受け、バプテスマを受けました。ですから、手を置いて祈ることは、ただ特別な働きをしている人々に限定されるものではないことを理解してください。神のみこころにおいては、どのような人も、他の人のために手を置くように導かれることがあるということです。

ハワイ島のコナに滞在していたとき、私と妻が大通りを歩いていると、一人の男性が私たちの方へ走ってきて、「私は病気なのです。祈ってくれませんか」と言ったのです。私が「どうしましたか」と聞くと、彼は「感電したのです」と答えました。彼は電気工で、感電したということです。彼の肩は麻痺していて、手を上にあげることができませんでした。私は躊躇しましたが、彼がしつこかったので、私たちはレストランの前の通りの真ん中で立ち止まって祈りました。妻が彼の肩に手を置きました。

翌日、ユース・ウィズ・ア・ミッションのデボーションの時間に、彼は両手を頭の上にあげていました。彼は手を置くということを通して奇跡を体験したのです。
その後、彼は私たちがアリゾナで牧会をしていたときに会いに来て、病院に検査に行ったときのことを話してくれました。医者は、「肩を検査したが、もう二度と頭の上まで腕を上げることはできないでしょう」と言っていたそうです。これは、手を置くことによって起こることの単なる一例にすぎません。

再びエペソ人への手紙を見ましょう。前に別の文脈でこの箇所を読みました。パウロがエペソに着き、ある弟子たちに会いましたが、彼らはバプテスマのヨハネの弟子でした。パウロが福音を説明し、彼らは主イエスの御名によってバプテスマを受け、パウロが手を置くと、彼らは異言を語り、預言したのです。ですから、手を置くことは聖霊の力を分け与える、とても聖書的な方法なのです。

実は、新約聖書には聖霊が与えられる 5 つのおもな例があります。そのうち 2 つのケースは、ペンテコステの日とコルネリオの家で起こったもので、神から権威的に与えられたものでした。他の 3 つのケースは、タルソ人のサウロがいたサマリヤとエペソで起こり、手を置くことによって聖霊が与えられました。ですから、それは神の導きの方法です。私は文字通り何千人もの人々に聖霊のバプテスマを授ける特権にあずかってきました。私の特定の強みは、人々が主を求めている時、信じるように導いて、その人々が受け取ることができるという信仰を持つように励ますことです。私は人々に手を置くこともありますが、いつもではありません。私は神の恵みによって、私は何千人もの人々が主から直接聖霊を受けるのを見てきました。

先へ進みましょう。手を置くことの次の目的は、教会のしもべたち、つまり役員を任命することです。教会によっては、役員というギリシャ語が「しもべ」であることを知ったら、呼び方を変えてしまうのではないでしょうか。ある教会では、役員会は権威の多くを持っています。しかし、もしそれが「しもべ会」と呼ばれるとしたら、どうでしょうか。私たちは専門用語のいくつかを混同してしまっています。

妻と私が、以前パキスタンの入国審査を通過した時のことです。そのパキスタン人の入国審査官に、「職業は何ですか」と聞かれました。そこはイスラム教の国ですので、かなり注意する必要があると思っていました。考えた末に私は、「ミニスターです」と答えました。それは、ほとんどの人がよく知らない単語なので、安全だろうと思ったのです。しかし、その瞬間から私はどこに行っても大変なもてなしを受けました。列の先頭に案内されるといったようなことです。後でわかったことですが、審査官は私がアメリカ政府の大臣だと思ったのだと気づきました。このように、ミニスターは、本来の意味である「しもべ」からかけ離れてしまっています。
もしあなたがミニスター、つまり牧師なら、あなたはしもべです。主のしもべであり、主の民のしもべなのです。

さて、使徒 6 章を見ると、教会は良い意味で問題が生じました。あまりにも早く教会が成長したので、必要の多い貧しい人や未亡人の世話ができなくなっていました。

新約聖書の教会についてもう一つお話しします。彼らは、常に未亡人（やもめ）の世話の責任を引き受けており、それは当然のことでした。今日の問題は、教会がその責任にあまり気づいておらず、多く

の機能を政府に任せてしまっていることです。しかし、どのような形であれ、教会は貧しい人たちに対する責任があると私は信じています。

さて、信者たちは使徒たちのところへ来て、「秩序が乱れて、未亡人たちがなおざりにされている」と言いました。そこで使徒たちは、「わかりました。方法を考えましょう」と言いました。それはかなり重要なことでした。十二使徒は、弟子たち全員を集めて言いました。

> *「私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」*

使徒的な奉仕とは何でしょうか。祈りとみことばの奉仕です。それは管理運営的なものではありません。彼らは、管理運営には他の人たちを選び、使徒たちは自分たちの責任にもっぱら励むと言いました。ですから、彼らは、「あなたがたの中から…七人を選びなさい」と言ったのです。その人たちは、御霊に満ちた人たちでなければなりませんでした。初代教会では、聖霊に満たされた人でなければ、役員に任命されませんでした。

選ばれた人々は経済の管理もすることになっていたので、それは使徒たちの知恵によるものでした。会衆の中から人を選び、人々から承認を受け、任命し、その職に当たらせました。会衆は自分たちが選んだ人たちなので、後になって不満を言うことは決してありませんでした。神は何と知恵に満ちた方でしょうか。

聖書は、その人たちを使徒たちの前に立たせ、使徒たちは祈って、手を彼らの上に置いたと記しています。使徒たちが彼らを任命しました。あなたはそれを役員と呼びたいかもしれませんが、そこでは役員という言葉は使われていません。むしろ「助け手」と呼んだ方がいいと私は思います。使徒たちは、自分たちが忙しくなってきたので、助け手が必要だと言ったのです。

助け手という立場は非常に重要です。その 7 人のうちの 2 人に起こったことは興味深いです。ステパノは最初の殉教者となり、ピリポは神が認める伝道師となりました。ですから、しもべの立場から始まることは、次の段階への足掛かりとなり得ることを覚えておいてください。事実、神は一番下から始める人だけを昇進させるので、しもべの立場から始めないなら、神からの後押しは決してないでしょう。

按手の次の目的は使徒たちを派遣することです。新約聖書には使徒は十二人しかいないと思っていますか。そうではありません。私は数えてみましたが、約 20 人が使徒と呼ばれています。基盤となる十二人の使徒がおり、それ以外にも名前が出てくる使徒たちがいます。そのうちの何人かを見てみましょう。

使徒の働き 13 章には、多くの面で模範的な教会であったアンテオケの教会について語られています。実際、それはある意味でエルサレムの教会よりも進んでいました。エルサレムの教会は内部にフォーカスしすぎている部分があったようです。それは今日の私たちの教会でも大きな問題の一つです。ほとんどの教会があまりにも教会内のことにフォーカスしすぎていて、福音を聞いたことのない人々に福音を

宣べ伝えるという本来の仕事のための時間がほとんどありません。しかし、アンテオケの人々は異なったビジョンを持っていました。それはとても重要なことです。使徒の働き 13：1 から読みましょう。

「さて、アンテオケには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、国主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどという預言者や教師がいた。」

あなたが預言者や教師を信じるなら、あなたには使徒となる道が開かれています。

「彼らが主を礼拝し…」

主を礼拝することはとても重要です。それについては後でお話しします。礼拝は鍵となるものです。

「彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、『バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい』と言われた。」

神なる聖霊が語っています。「バルナバとサウロをわたしのために聖別しなさい。」聖霊がどのように語ったと思いますか。肉体を持たない声が聞こえたか、それとも 5 人のうちの一人を通して聖霊が語ったと思いますか。それはあなたで判断してください。私自身は、それは預言的なことばであったと思います。

「そこで彼らは、断食と祈りをして・・・」

私は断食と祈りを大いに信じています。今それについて詳しく話す時間はありませんが、人々が断食と祈りを学ばない限り、教会の中での多くのことは起こらないでしょう。これは彼らにとって 2 度目の断食でした。メッセージを受け取った時、彼らはすでに断食していました。

「彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した。」

彼らは 2 人を遣わしました。ユース・リーダーを選んだのではないことに注目してください。彼らはトップの 2 人を選びました。最高の人材を遣わしたのです。ミニストリーのアウトリーチ促進は、下からではなく、上から行うのです。このことも今日の教会が学ぶべき大きな教訓です。宣教師やその他いかなる召命であっても、神に選ばれた最高の人材が遣わされるべきです。しかし、私たちは教会の内部構造に全く誤った重点を置き、自分たちのことで頭がいっぱいで、主のビジョンを持っていません。

このように言うことをお許しいただきたいのですが、聖霊の現代の流れにある多くの人々は、大昔の天文学者プトレマイオスのようです。私は天文学の知識はあまりありませんが、プトレマイオスは、太陽が地球の周りを公転する、いわゆる天動説を確信していました。そこにコペルニクスが現れて、「それは間違っている。逆である。地球が太陽の周りを公転しているのだ」と唱えました。教会は当然のごとく、そのような発言をしたコペルニクスに死刑判決を下しましたが、彼は何とか死を免れました。教会は何故そんなに腹を立てたのでしょうか。教会の伝統に反するからでした。多くのクリスチャンがなおもその時代のような生き方をしていると言えるでしょう。教会は今でも、御子、父なる神が私たちの周りを回っておられると信じているのです。その逆であることをまだ悟っていません。そうです、私たち

が御子の周りを回っているのです。

私たちの利益のためにイエスがおられるのではなく、イエスの栄光のために私たちはいるのです。私たちが歌う曲には、イエスが私たちのためにしてくれたことだけにフォーカスしている曲があります。それは素晴らしいことですが、私たちがイエスのためにすることのほうが重要なのです。それを強調したいのです。

とにかく、このアンテオケの教会は 2 人の最高の人材を遣わしました。遣わされたのは預言者と教師でしたが、次の章の使徒の働き 14 章を読むと、その 2 人についてこのように書かれています。4 節です。

「ところが、町の人々は二派に分かれ、ある者はユダヤ人の側につき、ある者は使徒たちの側についた。」

そして 14 節にはこうあります。

「これを聞いた使徒たち、バルナバとパウロは…」

そうです。彼らは使徒になっていました。どのようにしてなったのでしょうか。聖霊の導きによって教会から遣わされることによってです。使徒という言葉の意味は、「遣わされた者」です。遣わされなければ、使徒ではありません。ですから、このパウロとバルナバは最初の十二弟子ではありませんでしたが、今や使徒と呼ばれています。聖霊の任命によって使徒となりました。彼らはどのようにして聖霊の声を聞いたのでしょう。祈り、断食し、神を礼拝していました。教会のリーダーシップがそのようにするとき、私たちは使徒たちが生まれるのを見るのです。

さて、次に新約聖書で按手を用いているのが見られるのは、長老たちの任命です。使徒の働き 14：23 です。

「また、（バルナバとパウロは）彼らのために教会ごとに長老たちを選び…」

まず、使徒たちが長老たちを任命しました。
そしてエペソの町で自分の代理人であったテモテへ手紙を書き、パウロは I テモテ 5：17 以降で、長老はどういう人であるべきかについて指示しています。

「よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。」

さて、新約聖書を分析すると、「二重に尊敬を受ける」というのはある種の金銭的報酬を意味します。新約聖書の尊敬という言葉は、単なる肩書のようなものではなく、人々の必要に応える方法によって尊敬を表すという意味です。ですから、報酬の基準があり、みことばにフルタイムで奉仕している人は、その仕えている人々から費やしている時間に応じた報酬を受けるべきなのです。
パウロは長老たちの扱いについて続けています、19 節です。

「長老に対する訴えは、ふたりか三人の証人がなければ、受理してはいけません。」

これはとても重要なことです。長老に対する訴えは、少なくとも二人の証人がなければ受けてはいけません。神の人が中傷される時、二人、三人の証人の要求なしに中傷する多くのケースを私は見てきましたが、決してそのようなことをしてはいけません。なぜなら、奉仕者を攻撃するサタンのおもなやり方の一つは、彼らに対する間違った告発をすることだからです。それを防ぐ方法がこれなのです。長老に対する訴えは、ふたりか三人の証人がなければ、受理してはいけません。この規則を守ることによって、教会の多くのことが変わっていくでしょう。

パウロは 21 節でこう続けています。

「私は、神とキリスト・イエスと選ばれた御使いたちとの前で、あなたにおごそかに命じます。これらのことを偏見なしに守り、何事もかたよらないで行いなさい。また、だれにでも軽々しく按手をしてはいけません。また、他人の罪にかかわりを持ってはいけません。自分を清く保ちなさい。」

これは長老に関することで、誰にでも軽々しく按手してはいけないとパウロが言っているのは、軽々しく長老を任命してはいけないという意味です。あなたが神の思いを持っているかどうか十分注意してください。また、その人に求められる資質があるかどうかも、しっかり見極めてください。辞めさせるよりも、按手するほうが簡単なことが多いからです。いったん長老を任命してしまうと、間違った任命であった場合に、その人を辞めさせることは大きな問題になるのです。ですから、パウロはテモテに十分注意しなさいと言っているのです。それが神の選びだという確信がない限り、誰にも長老の任命をするために按手しないでください。

また、他の人の罪に関わってはいけないと言っています。長老としてふさわしくない者、教会員と神の民から搾取するような者を任命したなら、私たちはその人の罪に関わることになるからです。ですから、本当に気を付けなければなりません。

私の教会は、常に模範的な教会というわけではありませんが、長老を任命するときは次のようにします。最近 3 人の長老を任命したのですが、彼らは 2 日間にわたって質問に答えなければなりませんでした。すべてのことを考慮する必要があったからです。軽々しく長老の任命することで、多くの問題が教会に起こってしまうと思います。

このように、按手について多くの教訓があります。それは小さなことではありません。しもべであれ、使徒であれ、長老であれ、これらのすべてのケースにおいて、按手する目的は何でしょうか。それは、奉仕のために人に権威を分け与え、遣わし、承認し、整えることです。

按手にはもう一つの機能があります。パウロはローマのクリスチャンにこう書き送りました。「私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです。」しかし、パウロはその時には行かず、あとから行きました。II テモテ 1：6 でテモテにこう書いています。

「それですから、私はあなたに注意したいのです。私の按手をもってあなたのうちに与えられた神

の賜物を、再び燃え立たせてください。」

パウロの按手によって、テモテに賜物が与えられました。賜物はギリシャ語ではカリスマと言います。私の個人的な意見ですが、テモテに与えられた賜物（カリスマ）は、使徒的な賜物であったと信じます。なぜなら、それは他の幾人かの使徒にも見られるものだからです。

では、テモテの使徒的賜物を見てみましょう。テモテも使徒でした。聖書からそれを見ていきましょう。Ⅰテサロニケ 1：1 です。この手紙はパウロとシルワノ（シラスとも呼ばれている）とテモテの 3 人によって、テサロニケの教会に宛てて書かれました。パウロだけではなく、その 3 人が著者です。
その手紙の 2：6 で、この 3 人は言っています。

「また、キリストの使徒たちとして権威を主張することもできたのですが、私たちは、あなたがたからも、ほかの人々からも、人からの名誉を受けようとはしませんでした。」

パウロ、シラス、テモテの 3 人はみな使徒でした。使徒の奉仕は昔の遺物ではなく、エペソ 4 章にあるように、神は私たちがみな、信仰の一致に達するまで使徒を置かれます。率直な心の人なら誰でも、私たちはまだ信仰の一致に達していないことを認めざるを得ないでしょう。ですから、使徒が必要とされるのであって、牧師、伝道者、預言者、教師そのすべてが、信仰の一致が完成するまで必要とされているのです。

私は何人の使徒がいたと言いましたか。パウロ、バルナバ、シラス、テモテです。ペンテコステの日以降に任命された使徒は 4、5 人です。

テモテの使徒的賜物について少し考えてみましょう。テモテは使徒と呼ばれていました。彼はどのようにして使徒になったのでしょうか。これはとても重要な質問だと思います。教会には使徒が必要だからです。思い出してください。黙示録でイエスはエペソの教会をほめていますが、それは使徒と自称しているが、実はそうでない人たちを試して、その偽りを見抜いたからです。使徒だと自称する人々をみな受け入れてはいけません。彼らは試されなければなりません。嘘をつく者の結末を知っていますか。火に投げ込まれます。これは非常に深刻なことです。使徒だと自称しているが、実はそうでないなら、その人は火の海に投げ込まれるのです。

では、この状況について見ていきましょう。使徒 16 章で、パウロとシラスは二回目の宣教旅行に出発しています。1 節です。

「それからパウロはデルベに、次いでルステラに行った。そこにテモテという弟子がいた。信者であるユダヤ婦人の子で、ギリシャ人を父としていたが、ルステラとイコニオムとの兄弟たちの間で評判の良い人であった。」

通常、教会の重要な立場に就こうとする人に求められるものの一つは、教会員たちからの良い評判です。もし、教会の人たちからの評判が良くなければ、外の人々がその人のことを何と言おうと、ほとんど意味がありません。

以前、私たちがエルサレムにいた頃、スウェーデンから一人の女性が私たちと一緒に働くために派遣されてきました。私の前の妻リディアは非常に聡明で、その女性への多くの推薦文に目を通しました。妻は、一つだけ欠けているものがあると言いました。彼女の母教会からの推薦がなかったのです。私たちは彼女を受け入れましたが、そのことを後悔しました。彼女は多くの問題を起こしたのです。私はその経験から、教会からの評判が重要なことを学びました。人を選ぶとき、最も重要な推薦者は、その人と一緒に生活してきた人々、一緒に働いてきて、その人を良く知っている人たちです。その人たちが推薦できないなら、他の推薦は何の価値もありません。

しかし、テモテは自分が奉仕していた教会の長老たちからの評判は良かったため、パウロは彼を呼んで、「一緒に行こう」と言ったのです。テモテへの手紙を注意深く読んでいくと、パウロがテモテにこのように言っています。Ⅰテモテ 4：14 です。

> *「長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある聖霊の賜物を軽んじてはいけません。」*

ですから、私の結論はこうです。テモテはパウロとシラスに同行するようにと、預言のことばが与えられたということです。その預言のことばとテモテの資質に基づいて、地域教会の長老たちはテモテに按手して送り出したのです。彼は使徒的賜物としての聖霊の賜物（カリスマ）を受けました。私はそのように理解しています。

さて、すでに読みましたが、Ⅱテモテ 1：6 でパウロがテモテに言った箇所と比較してみましょう。

> *「それですから、私はあなたに注意したいのです。私の按手をもってあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。」*

その理解には様々あると思います。このルステラでの状況において、預言が与えられ、十分に試されたというのが最も可能性が高いでしょう。その預言は、テモテはパウロとシラスに同行するようにというものでした。長老たちが「私たちはテモテを推薦する」と言い、パウロが「私たちは彼を受け入れる」と言い、パウロと長老たちが按手し、テモテに使徒的賜物を与えたのでしょう。
その預言が重要であったことに注目してください。預言とは、重要であるか、時間の無駄であるかのどちらかです。Ⅰテモテ 1：18 でパウロはテモテにこう書いています。

> *「私の子テモテよ。以前あなたについてなされた預言に従って、私はあなたにこの命令をゆだねます。それは、あなたがあの預言によって、信仰と正しい良心を保ち、勇敢に戦い抜くためです。」*

これが預言の本来の目的です。反対に直面する人を励まし、その人が本当に神に選ばれたことを知ることです。このことは、私の著書『Laying on of Hands』でも少し触れていますが、ある有名なクリスチャンのリーダーが特定の働きをするようにとの預言を受けました。しかし、彼は様々な問題に直面し、落胆し、その働きをあきらめかけていたときにその本を読み、「私は預言に従う」と決心しました。これは現在、多くの国々に影響を与えている彼の働きに導いたものの一つでした。

聖霊によって与えられる預言がいかに重要であるか、お分かりになったと思います。実は、私は多くの預言にうんざりしています。私はそれをカリスマ占いと呼んでいます。人々が来ると、手を置いて、「あなたはこれこれをする」と言うのです。そうなることもあるかもしれませんが、ほとんどの場合、それは起こりません。預言と占いは紙一重です。占い師は事実を告げることができると知っていますか。使徒 16 章でパウロとシラスが誰であるかを知ったのは、占い師の女でした。ピリピの町の誰よりも早く、その女は、パウロとシラスが救いの道を示すいと高き神のしもべであることを知っていました。しかし、その女はサタンのしもべでした。私はみなさんに警告しておきたいのです。

さて、私は危険性と予防策について簡単にお話ししましょう。今までお話しした中に 2 つの危険がありました。
一つ目、不適切な人を推薦することです。それをして混乱が起こったとき、あなたはその混乱の責任の一端をあなたが担っていることになるからです。

二つ目、霊的悪影響です。あなたは悪霊から人を解放するために、手を置いて祈ることもあると思いますが、あなた自身を守るすべを知らなければなりません。なぜなら、それは双方向に働く可能性があるからです。あなたが神の霊を与えることができるか、その悪霊があなたに影響を及ぼすかです。私がまだ軍隊にいた頃、私たちのグループで起こったことですが、深刻な鬱の霊に苦しんでいる人に手を置いて祈りました。私たちは主の導きがあったわけではなく、ただそうしたのです。何が起こったでしょうか。私たち全員が鬱に攻撃されたのです。私たちは自分自身を守っていなかったのです。

ですから、あなたが誰かに手を置くときは、守りが必要です。祈りと謙遜差が必要です。聖霊に導かれてください。「神の御霊に導かれる人は誰でも、神の子どもです。」

イエスの血潮に守られてください。イエスの血潮のもとでどのように守られるかを知ってください。そして、イエスが弟子たちに言ったことを忘れないでください。「確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。」　アーメン。